ものなら。

從丙　あの女が年を取るまで生きて、安樂往生をするやうなら、女といふ女は悉皆化物になつちまはあ。

從乙　グロースタアさまの後を尾けていつて、何處へ往くのにもせい、手引にべドラムでも賴んであげよう。　べドラムめは、ぶらつくが持前の狂人だから、どんな案内でもしをらう。

從丙　さうしなさい。　予は麻と鷄卵の蛋白とを取つて來て、あの血だらけの顏を如何かしよう。　さあ、神さま、あのお方を助けてあげて下さい！

左右に別れて入る。

第四幕

第一場　荒野

エドガー出る。

エドガ　斯うして輕蔑まれてゐるのを知つてゐるはうがまだましぢや、始終さげすまれてゐながら口先で欺されてゐるよりは。　運命に見棄てられ、最ち惡い、沈み切つた境遇にゐるといふことは、いつかは浮上らうといふ望こそあれ、何も恐しいといふことはない。　およそ悲しいは、此上もない善い境遇からの變轉ぢや。　悲哀極れば喜悅來る。　さうして見れば、此そつけな

い空な風も、今の我身の良い友達ぢや。　汝に吹飛されて如是最惡の境遇に墮ちた予は、何一つ汝の世話にならんから氣樂ぢや。……や、だれだ、來たのは？

（グロースタア　一老人に手を引かれて出る。）

老人　父上ではないか、見すぼらしう手を引かれて？……おゝ、人生、人生、人生！　思ひもかけん有爲轉變に遭遇して厭世の念を起せばこそぢや、さうでなくば誰れが甘んじて老衰しようぞ。

老人　おゝ、お殿さま、わたくしは御先代さま以來、此八年間、お配下に住んでをりました。

グロー　去つてくれ、あつちへ去つてくれ、どうぞ歸つてくれ。　助けてくれても、予の爲には何にもならん。　汝の難儀になるわ。

老人　でもお行手がお分りになりますまい。

グロー　行手とてもない、それゆゑに目は要らん。　目の見えた時分には折々蹉躓いた。　生中有れば油斷の種、無いが却つて利益となる。……おゝ、憫然なエドガー、欺かれた父が怒の餌食となつたエドガーよ、息のうちにもう一度そなたの身に觸れることが出來たなら、亡うした眼を取戻いたともいはうに！

老人　（エドガーに）おい〳〵！　だれぢや、そこにゐるのは？

エドガ　（傍白）おゝ、神よ！　「今が最ち惡い境遇ぢや」なぞとは容易には言へんものぢや。　最前よりも惡い境遇に墮ちたわい。

老人　やい、おのれは何處へ往く？

グロー　乞食か？

老人　乞食で狂人なのでござります。

グロー　幾らか正氣でなうては乞食は出來ん筈ぢや。　此間の暴風雨の晩に、ちや

うどそんな奴に逢うた、それを見て予は、人間をば蟲螻ぢやと思うた。　其時伜の事が念頭に浮んだれども、まだ其折には心が釋けてをらなんだが、其後いろ〳〵聞及んだ。　あゝ、あの虬や蜻蛉を惡戯少年が扱ふやうに、吾〳〵人間をば神さまが扱はつしやる。　神は慰み半分に人間をばお殺しなさるのぢや。

エドガ　(傍白)如何して如是事になつたのであらう？　あゝ、辛やの、悲しい最中に阿呆を言はねばならんとは！　自分にも氣の毒、他人にも氣の毒ぢや。……且那さん、ごきげんよう！

グロー　裸體の奴か？

老人　さやうでござります。

グロー　それならば、おのしは何卒歸つてくれ。　若し尙わしの爲に一里か二里ドーヴァ海道を後追うて來てくれる深切があるなら、此裸蟲に、何か着る物

をば持つて來て遣つてくれい、わしは此奴を手引に賴まうと思ふ。

老人　あゝ、貴下さま、此汝は狂人でござります。

グロー　それが惡世の然らしむる所ぢや、狂が盲者の手を引く。　吩咐けた通りにせい、それが否ならば勝手にするがよい。　とにかく歸つてくれ。

老人　手元にござりまする最ち良い着る物を持つて來てやりませう。　わたくしの身は如何なりませうと關ひませぬ。

老人入る。

グロー　やい、裸體の男。

エドガ　トムは寒うござります。……(傍白)もう假裝し切れなくなつた。

グロー　これ、こゝへ來い。

エドガ　(傍白)でも假裝さんければならん。……(グロースタアに)貴下のお目から、あゝ、血が出ます。

グロー　おのしはドーヴァへ往く路を知つてゐるか？

エドガ　階段も大木戸も馬道も人道も、みんな知つとります。　惡魔がおどしやあがつたんで、トムの智慧は悉皆なくなつちまつた。　用心さつしやい、お歴々の息子さん、惡魔にとつゝかれんやうに！　あはれなトムには、惡魔が五頭まで一しよに取附きをりました。　淫亂はオビヂカット、その次は啞の魔王ホッビヂデンス、盜賊根性はマヒュー、人殺しはモドー、變妙來な面附をする癖はスチバヂゼビット。　それが其後腰元衆や女中衆に取附きました。

グロー　それだから且那、御用心をなさいまし！　こりや此財布を取れ、天の處罰を受けた爲に、あらゆる他の苦痛を怨む心もなうなつた奴。　予の不幸がおのしの幸福になるわい。　あゝ、神々よ、常に斯樣にお扱ひ下されい！　世の富有な、暖衣飽食の徒輩……天の定法を侮り、其身に感ぜぬゆゑに貧民の困苦を見ようともせざる徒輩をして、速

かに天の力を感ぜしめたまへ。　さすれば、分配によつて過剩のを滅し、各人ことゞく物足るに至らん。……（エドガーに）ドーヴァを存じてをるか？

エドガ　知つとります。

グロー　彼處に絶壁がある、岩で取限られた海の中央へ高く聳え覗込むやうになつてゐる絶壁がある。　ついあの緣際まで案内してくれい、さすれば予の身邊にある有價な物をおのしに與い

て、今の不幸を救うて遣る。　あそこから先は、案内は要らん。

エドガ　手を借さつしやい。　トムが案内するよ。

二人入る。

第二場　アルバニー公爵邸の前

ゴネリルとエドマンド出る。　一方よりオスワルド出て行逢ふ。

ゴネリ　(エドマンドに)ようお出なされた。　ま、どうしたんだらう、内の聖人さんが出迎もしない。……(オスワルドに)御前は何處に?

オスワ　お奥にいらせられますが、あんなにお變りなされた方はあるまいと存じます。　敵軍が上陸しましたことを申しあげましたところ、につこりとお笑ひになりました。　貴下の御歸館になりますことを申しあげましたら、お答に「ろくでもない」、それからグロースタアどのゝ二心や其御子息の忠義なお働きを申しあげましたところ、私を「馬鹿」とお叱りになりまして、汝はすつかり物を取違へてをるとおほせられました。　最もお嫌ひらしいことがお氣に入りまして、お氣に入りさうなことがお氣に障るやうでございます。

ゴネリ　(エドマンドに)では最早いらつしやらんがよろしい。　これは畢竟、事を大膽に能う爲ない夫の臆病根性からです。　侮辱を受けても、勢ひ決鬪せねばならんやうになると思ふと、わざと知らん介をしてゐる人です。……(聲をひそめて)途々申合はいた事は、何れ實現されるやうになりませう。……エドマンドどの、貴下はコオンヲールどのゝ許へお歸りなさい、急いで兵士を召集させて、其指揮をなさい。　わたしは此處で、夫と武器の交換をし

て、あの人には紡絲竿でも持たせませう。（オスワルドを見返りて）此腹心の家來を二人の間の通信者にします。程なく……若し貴下が大膽に御自分の利益を圖りなさる勇氣さへあれば……或夫人から一の命令をお受けなさることがありませう。……（窃かに指輪を渡しながら）これを附けていらつしやい。何にもいはないで。……頭をお傾げなさい。……（接吻して）此接吻が物を言うたなら、天へも登る心にもおなりだらう。考へて御覽。さやうなら。

エドマ　（膝まづいたまゝ）御爲には一命をも獻じまする。

ゴネリ　いとしい〳〵グロースタアどの！……

エドマンド　入る。

おゝ、同じ男でも何といふ違ひ方！　お前にこそ女は奉侍きたいと思ふ。今は幇間が予の肉體を横取りしてゐるのぢや。

オスワ　奥さま、殿さまがお見えになりました。

オスワルド　入る。

アルバニー　出る。

ゴネリ　口笛ぐらゐは吹いて下すつたつてよいでせう

アルバ　おゝ、ゴネリルどの！　こなたは、風が亂暴にこなたの顔へ吹きつける埃にも劣つた人ぢや。わたしはこなたの心立が懸念に堪へん。其本源をさへ蔑如にするやうな氣立は、何處さで募るやら圖られん。子枝でありながら、強ひて親幹から身を引裂き大切な養ひの液を絶つやうな女は、枯れ萎れて惡魔に利用されるものとなるに相違ない。

ゴネリ　もうお止しなさい、そんな馬鹿らしいお説法は。

アルバ　邪曲非道な者には賢明なことや正しい事が邪曲非道に見える。汚れた輩は汚れたものゝ外を賞翫し得ん。……お前さんの此度の振舞は何といふ事

ぢや？　子ではなくて虎狼ぢや。　父御を……首鎖で引廻される荒熊とても敬ひ懐いて其面を舐めるでもあらうと思ふあの情深い老翁を……野蠻にも非道にも、狂人にしてしまうたとは！　それをさせておくとは、コオンヲールどのもどうしたことぢや？　王には大恩を受け、王のお庇で、王族となつてゐながら！　若し天の神が、かういふ大不埒を罰するために目に見ゆる精霊を下したまふことがないやうならば、人間は大海の妖怪同様只もう力づくで相搏噬することゝならう。

ゴネリ　臆病者！　人に撲たれるために頬をくつゝけ、人に辱められるために頭をくつゝけてゐる人！　お前さんは恥辱と名譽とを見分けるだけの目を有つてゐなさらないんです。　お前さんは、悪人がまだ悪事を實行せんうちに罰せられるのを見て憫然だと思ふものは、馬鹿ばかりだといふことを御ぞんじないんです。……軍太皷は何處にあります？　フランス王が、油斷

しきつてゐる此國へ攻入つて、旗を飜し、羽附けた兜を輝かいて、お前さんの位を奪はうとしてゐる、それだのにお前さんは、阿呆がお説法でもするやうに、じつと座つてゐて、あゝ、何故彼れは其様な不法を働くかも善う出來た。

アルバ　女の相をした夜叉は、本體のまゝの夜叉より自身の面を見い、女夜叉！　も怖しう見えるわい。

ゴネリ　おゝ馬鹿！

アルバ　幸ひにも人間に化けて、今日までは本體を掩ひ來つた汝ぢや、恥を思ふなら、顔色に妖怪の本體を現しをるな。　若し此手をして予が怒の命ずるまゝにしてよいならば、汝の肉や骨を八裂にもすべき筈ぢやが、たとひ本體

は夜叉にもせよ、鬼にもせよ、女の相をしてゐるゆゑ助けておくのぢや。

ゴネリ　おや〳〵、大さう強いことね。……

使者出る。

アルバ　何事ぢや？

使者　おゝ、御前さま、コオンヲールさまがお亡くなりなされました、グロースタアどのゝ目をえぐり取らうとなされました際に、御家來の爲に。

アルバ　グロースタアの目を？

使者　幼少よりお養育になりました御家來の一人が、其體を見かねましたものと相見え、抵抗いたし、殿に劔を向けました、そこで殿はお怒になつて、その仁に飛びかゝり、其場で御成敗になりましたが、御自身にも重傷を負うて、其後御落命にござりまする。

アルバ　あゝ、天に裁判官のおはしますことがこれで分る　下界の罪惡をたちまちにお罰しなさるゝ。……併しながら氣の氣なはグロースタア！　彼れは一眼を失うたか？

使者　兩眼ともに失ひました。……（ゴネリルに）奥方さま、此御書面は早速の御返辭を要しまする。　お妹御さまからでござります。

ゴネリ　（傍白）一方からいふと、大ぶ都合が好いが、しかし、妹が寡婦となつたところへ、あのグロースタアが始終一、しよ……もしか折角築きあげたあの空想の城郭が破壞されてしまふやうなら、此生に何の樂みがあらう。……が、見やう次第で、さう苦い報知でもない。……（使者に）讀んだ上で返辭をしませう。

ゴネリル入る。

アルバ　彼等がグロースタアの目をえぐり取つた時、エドマンドは何處にゐたぞ？

使者　奥方のお伴をしてお館へ參りました。

アルバ　こゝにはをらん。

使者　はい、をりません。　歸つて行きまするのに逢ひました。

アルバ　彼れは其非道の所行を存じてをるか？

使者　存じてをります。　父を告發いたいたのは彼れにございます。　遠慮なく父を罰せしめうために、故と席を避けたのでございます。

アルバ　（獨白のやうに）グロースタアよ、予が生きてゐる以上は、お前が王に對して盡いてくれられた其忠勤の禮もいはうし、目を失うた其怨みも必ず返いて進ぜまする。……（使者に）こりや、こゝへ。　尙他に存じてをることがあらば、話してくれい。

二人入る。

第三場　ドーヴアに近きフランスの陣營

ケントと一紳士と出る。

ケント　何故フランス王には、さう急に歸國せられたか、其理由をごぞんじでござるか？

紳士　御本國に爲殘いておかせられた或重大な事件がござつたところ、それが御出陣以後一段重大と相成り、打棄ておけば、王國の安危にも關りますところから、止むを得ず、御自身お立歸りになつたのでござる。

ケント　後には誰れを總督として殘しおかせられました？

紳士　フランス軍帥ラ・ファードのでござる。

ケント　彼の書面を御覽なされて、王妃には、御愁歎の御模樣でございましたか？

紳士　さやうでござる。　妃は書狀を取らせられ、私の前で讀ませられましたが、折々あのお美しい頰を傳うて、涙がはらはらと落ちました。　妃はじつと悲痛を制へようとなされると、それをまた悲痛めが謀反人のやうに顚覆さうといたしました。

ケント　おゝ、では感動なされたな。

紳士　併し取亂しはなさりませなんだ。　忍耐と悲歎とが相鬪ひました、どつちが勝つたはうがお妃をば最も立派に見えさせるであらうと思つたかのやうに。　照降雨といふのがござるが、妃の笑を含みつゝ涙をお落しなさるゝ美しさは、それの一段鮮麗なのとも見えました。　あの丹花の唇に漂うた微笑は目には如何いふ賓客がゐるかをも知らぬ體、さうして其賓客が目から落ちる美しさは眞珠がダイヤモンドから落ちるやう。　早い話が、泣

顏ほど可愛らしい美しいものは無いでござらう、若し誰れが泣いてもあのやうに似あひますれば。

ケント　何かお尋問はなされませなんだか？

紳士　實に、一兩度、「父上」と、譬へば、それがお胸に迫つて言はずにはをられんといふ風に、喘ぐやうにおつしやられました。　それからお泣きになつて「姉上たち！　女の恥辱ぢや！　姉上たち！……」

ケント　なに、父上と！　姉上たちと！

紳士　「え、あらしの最中に！　夜中に！　慈悲といふものは此世に無いものと思はにやならぬ！」　さうおつしやつて、あの天人のやうなお目から、貴重な露をそゝぎ下し、泣聲を打鎭めておしまひなされました。　それから、只一人でお歎きなされうとてか、奥の間へお入りなされました。

ケント　（獨白のやうに）　あゝ、人間の根性を支配する者は、天上の星に相違ない。　さ

うでなくば、同じ夫妻の腹から、斯うまで性質の異つた子が生まれう筈がない。……其後お妃とお話はなさらなんだか？

紳士　いたしません。

ケント　お逢ひなされたは、王お歸國の前でござるか？

紳士　いや、後でござる。

ケント　時に、御亂心遊ばされたリヤ王には、目下此市中にいらせられる。　お心の調子の好い時分には、吾々共の申すことを幾分か御了解なさるらしいが、コオデリヤさまと御面會のことは、如何程お勸め申しても御承諾がない。

紳士　何故でござるか？

ケント　此上もなく恥入つていらせらるゝからぢや。　末姫君に與へらるべき恩惠を剝取り、外國へ逐ひやり、其大切な權利をあの犬のやうな女兒たちにお遣りなされた御自身の無慈悲や其他の失策が、蝮蛇の如くお心を刺すので、身を燒かるゝやうに耻ぢてお逢ひなされぬのぢや。

紳士　あゝ、お氣の毒なお方ぢや！

ケント　アルバニーやコオンヲールの軍勢の事はお聞きなさらなんだか？

紳士　既に出陣したさうにござる。

ケント　さて、これから、お手前をば王の御許へ案内してお傍にゐて貰ひませう。大切な仔細あつて、今暫く本名を包みおくことでござるが、手前の素姓が明白になつた時分に、決して知交になつたことを後悔なさるゝやうなことはござらん。　どうぞ一しよに來て下され。

二人入る。

第四場　同處　天幕内

太鼓手、旗手等をしたがへてコオデリヤ、侍醫、兵士等出る。

コオデ　あゝ、きつと父上ぢや。　つい今がたも、暴風の海のやうに亂心しておいで遊ばすのに逢うたとの事ぢや、頭には野や麥畠に生えてゐる穢くるしい雜草や毒草で製へた花冠を冠つて。……百人組を派遣いて、高々と生ひのびてゐる畠の隈々を殘りなう搜索して、此處へお伴れ申せ。

士官入る。

侍醫　人間の智慧の力で、狂うたお心が如何位までは治るであらうか？　父上をお救ひ申す者には、わたしの有つてゐるものは、何品でも遣しまする。御療治の法はござりまする。　陛下は人體の保母と稱しまする安眠を不足していらせられます。　それを催させ申すには、種々の藥草がござりまする、其力を借りますれば御安眠あらせらるゝに相違ござりませぬ。

コオデ　（獨白のやうに）ありとある貴い秘法、地中に籠つて未だ世に知られざる藥種

靈草、何卒我涙に濡うて生ひ出でよ！　善良なる御方の御惱を癒しまゐらする助けとなれ！……早う王をお搜し申せ。　早うせぬと、何の辨別もない御狂氣の爲に、どのやうなことがあらうも知れぬ。

使者出る。

使者　御注進。　ブリテインの軍勢が攻寄せてまゐりまする。

コオデ　それは承知の事ぢや。　接戰の准備は整うてゐる。……（獨白のやうに）おゝ、父上さま、此たびの出陣はあなたのお爲でござります、さうなればこそフランス王が聽納れてくれました、わたくしの切ない賴みを。　功名を思ふ高慢心などから此軍を起したのではない、あなたを思ふがためばかりぢや、お年をめしたあなたを元の通り王位に復したいと思ふばかりぢや。　早う消息を聞いてお目にかゝりたい。

コオデリヤ其他一同入る。

第五場　グロースタアの居城

リガンとオスワルドと出る。

リガン　兄上の御軍勢は出陣しましたか？

オスワ　御出陣になりました。

リガン　御自身で？

オスワ　やつとお勸め申しまして。　お姉上さまのはうが武人でいらせられます。

リガン　エドマンドどのとアルバニーどのとは、何もお會談はなかつたか？

オスワ　ござりませんでした。

リガン　エドマンドどのへの姉上の書狀といふは、何の用であらうぞ？

オスワ　一向にぞんじません。

リガン　エドマンドどのは、大切な用があつて、急に出立をなされた。　あのグロースタアの目をくりぬきながら、生いておいたのは大きな脫落であつた、行く先々で我々の敵をこしらへさせるやうなもの。　多分エドマンドどのは、慘な父を憫み、寧そ一思ひに暗の命を始末せうと思うて、出掛られたのであらう。　一つには、敵軍の强弱をも斥候しよう爲であらう。

オスワ　私は是非お後を追うて、書狀をお渡し申さねばなりません。

リガン　わたしどもゝ明日は出陣します。　それまでお待ちなさい、途中が危險ですから。

オスワ　さういふ譯にも參りません。　奥方の御嚴命でござりますから。

リガン　何でエドマンドどのへ書狀をお送りなさるのであらう？　お前さんが口上で傳へてもよさゝうなものぢやに。　恐らく何か……わたしには解らないけれど。……お前を無二の人とも思ひますが……わたしに其書狀を開封

させて下さい。

オスワ　奥さま、それはどうもその：

リガン　お前さんのとこの奥さんは、お所夫を愛してはゐなさらない。　先日こゝへ見えた時分、エドモンドどのに對して妙な目附をしたり、口程に物を言ふ表情をなされた。　お前さんは姉上の腹心も同様だから……

オスワ　あの私が？

リガン　知つてゐていふのぢや。　何事も承知です。　ですから悪いことは言ひません、此手紙を持つていつて下さい。　わたしの殿御は亡くなりましたによつて、豫てエドマンドどのと話しあうておいたことがあります。　あの人に取つても、お前のとこの奥さんよりもわたしに結婚したはうが便宜です。　其他の事は推察したがよい。　もしエドマンドどのにお逢ひだつたら、どうぞこれを渡いとくれ。　さうしてお前のとこの奥さんに此事を話

いて、ようお分別なさいましとおいひ。　さやうなら。……若しか彼の盲の謀反人の在所がわかつて、其首を取つてくれれば、誰れでも御恩賞が貰へますよ。

オスワ　どうか見附けだしたいものでございます！　さうなりや、私がどちらがたかといふことを必定お見せ申します。

リガン　きげんよう！

オスワルド　入る。

第六場　ドーヴアに近き平野

グロースタアと農夫の服裝したるエドガーと出る。

グロー　岡の頂上へはまだ着かんかの？

エドガ　今登りなさるところです。　ほら、此通り骨が折れます。

グロー　平地のやうぢやが。

エドガ　おそろしい險阻なんで。　ほら、浪の音が聞えます。

グロー　聞えやせんが。

エドガ　ぢやあ貴下は、目の苦痛で以て他の感覺まで如何かなすつたのでございませう。

グロー　さうかも知れん。　どうやらおのしの聲が變つて、言ふことも言語つかひも、前よりはようなつたやうぢや。

エドガ　大間違。　着る物が變つたばかりでございます。

グロー　どうも言語づかひがようなつた。

エドガ　さあ〳〵。　こゝぢや。　肅としてござらつしやい。……あゝ、此下のはうを瞰すと怖しくつて目が眩む！　中央ごろを飛んでゐる並の鳥や赤脚鳥が

全然甲蟲位にしか見えない。　あゝ、崖の中途に、濱芹を取つてゐる男が垂下つてゐる。　危い商賣だなあ！　當人の頭よりは大きくは見えない。　濱邊を歩いてゐる漁夫は、鼷鼠位に見える。　あそこの、大きな錨を下いてゐる船が艀位に小さくなつて、艀は浮標ぐらゐ、いや、見えない位に小さい。　やくにもたゝん無數の小石にぶつかつてゐる荒浪が餘り高くも聞えん。　予や最早見まい、頭がぐら〳〵して、目が眩んで、眞逆樣におつこちるかも知れんから。

グロー　おのしの立つてゐるところへ立たせてくれ。

エドガ　手をお借しなさい。　そら、すぐ一尺ばかり前が崖の端ぢや。　世界中が貰へるからつて、こゝぢやあ飛上がれないわい。

グロー　手をはなせ。……こりや、こゝに別の財布がある。　此中にある寶石は、貧乏人が貰へば、立派な代物ぢや。　神のお惠で、これを資に榮えをれ！……ず

つと彼方へ往つてくれ。　予に暇乞をして往く足音を聞かせてくれ。

エドガ　ぢやあ、旦那、ごきげんよろしう。

グロー　きげんよう。

エドガ　（傍白）半狂亂になつてござるのを、かうして玩弄にするのも、それが治したいばつかりぢや。

グロー　（膝まづきて）おゝ、天の神々！　此生を只今棄てまする、尊神がたのお前で、怨まず、悲まず、此辛い重荷を振落しまする。　此上此重荷を荷ひをりましても、尚幸ひに、逆ひがたき尊神方の御意に對し、お怨言がましいことを申さないにも致せ、あさましい燃燼同樣の此體軀が長う燃えつゞいてゐようともぞんじません。　若しエドガーが生きてをりますれば、何卒彼れに幸ひをお與へ下されませ！……やい、おのし、さやうなら。

エドガ　（遠く離れたらしくもてなし）もうまゐりました。　さやうなら。

グロースタア絶壁から飛んだ積りにて前へ倒れる。　其儘打伏してゐる。　エドガー不安の思入。

（傍白）しかし、命を奪られたい〳〵と思つゐる時分には、神經作用で死んでしまふやうなことが無いともいへない。　來た積りの處へ實際來てゐなすつたなら、今頃は全く氣絶してゐなすつたでもあらう。　生きてゐなさるか、死なさつしやつたのか？……（そばへ寄りて）おういく、お前さん！　こゝなお人！　これさ、あんた！　物を言はつしやい、物を！……（傍白）斯うして眞實に死なつしやるかも知れん。　いや、氣がついたわ。……あんたは如何いふ人ぢや？

グロー　あつちへ往け、わしを死なせてくれ。

エドガ　蛛の糸か、鳥の羽か、空氣かなんぞなら知らんこと、あんな高いとこから墜落ちりやあ、卵のやうに摧けてしまふ筈だのに、あんた、息してゐなさる、

身體も重たいし、血も出ないし、物もいはつしやるし、何のこともない。十本の帆柱を繼合いたとて、あんたが眞直に落ちて來なすつたゞけの高さは出來ない。あんたの助かつたのは不思議ぢや。もう一度物をいはつしやい。

グロー　一體予は落ちたのか、落ちなんだのか？

エドガ　落ちさつしやつたとも、あの白壁のやうな斷崖の頂上から！　高あく見上げて見さつしやい。するどい聲して啼く雲雀が、遠くつて見えもせんければ、聞えもせん。つい見て見さつしやい。

グロー　あゝ、見る目はないのぢや。……あゝ、不幸なものは、死んで其不幸を絶つだけの利益さへも得られんか？　虐君の目を拔いて、自殺をして　其高慢の鼻をあかすことが出來れば、不幸の中にまだしも慰藉があるのぢやけれど。

エドガ　手をお貸しなさい。起きたり。さう。どうぢやな？　脚が立つかな。

起てたわ。

グロー　よう起てる、よう起てる。

エドガ　こりや不思議なことぢや。あの斷崖の頂上で、最前あんたに別れていつたのは、ありや何者ぢやな？

グロー　可哀さうな不運な乞食ぢや。

エドガ　こゝで立つて見てゐると、どうやら彼奴の目は二つの滿月のやうに見えた。鼻が千もあつて、角がねぢれて、荒れた海のやうに波を打つてゐた。ありや惡魔に相違ない。お父さん、あんたは幸福な人ぢや、こりや、人間の能爲ないことをしてのけさつしやる何事も見透しの神さまが、あんたを助けさつしやつたのぢや。

グロー　やつと今正氣に復つた。これからは苦患其者が予に向つて「もうよい、死ねい」と呼び立てるまでは忍びませう。お前さんが話の其者を、わしは人

間ぢやと思うてゐた。　さういへば折々惡魔が〳〵といひをつた。　あいつが予をこゝへ伴れて來たのぢや。

エドガ　氣を落附けて心安う思うてござれ。……や、誰れぢや？

リヤ　種々の雜草の花を以て奇怪な風に身を飾りて出る。

リヤ　正氣なら、あんな風には着飾りはすまい。

（幻影を相手にして）うんにや、貨幣を鑄造へたからというて、予を如何することも出來んわ。　予は國王ぢやぞ？

エドガ　おゝ、腹が裂けるやうぢや！

リヤ　（幻影を相手に）其點に於ては、自然は人工以上である。……そら、其方の手附ぢや。……あいつの弓の使ひやうは烏威しのやうぢや。……三尺のを引け。……（急に聲をひそめて）あれ〳〵、鼠ぢや。　叱々。　炙つた乾酪の此一片なら大丈夫。……（俄に大きな聲にて）そら、手袋を投げたぞ。　巨人が來ようとも敵手

にならうわい。……褐色の矛を持つて來い。……おゝ、よう飛んだな、鳥めが！　的に、的に！　ひゅう……（ふとエドガーに目をつけ）合言葉を言へ。

エドガ　甘いマージョラム。

リヤ　通れ。

グロー　あの聲音には記憶がある。

リヤ　（グロースタアに目をつけ）や！　ゴネリルぢやな。……白い髯を生しをつて！……予にみんなが、犬のやうに諛ひをつて、貴下さまは、まだ黑いのが生えませんうちから、お髯に白い毛が生えましたなぞと言ひをつた。　予のいふことゝいへば、何でもかでも口眞似をして「さやうでござる」の「さやうでござらん」のといひをる。　えゝ、神聖な道でないわ。　雨にびしよ濡になつて、風で齒ががた〳〵とふるへた時に、予が雷に鎭れと言うたけれど、鎭らなんだ。　それで予が悟つた、嗅附けてくれた。　へつ、あいつらの言ふこと

は決してあてにならん。　あいつらは予を萬能ぢやといひをつた。　虚ぢや、予は癪をふるはん譯にはいかん。

グローロー　あの聲音こそはよう記えてゐる。　王ぢやないか？

リヤ　さうぢや、悉く王ぢや。　予が睨むと、見い、臣下どもは皆ふるへをのゝくわい。……そやつの一命は赦し遣す。……汝の訴訟は何ぢや？　姦通？……死刑には及ばぬわい。　姦通に死

刑といふことはない。　いや〳〵、鷦鷯もする、小さい金びかりの蠅も、予の面前で行うてをるわい。……燗んに行らせたがよい。　現にグロースタアの妾腹は、正當な閨房のうちで生せた予が女兒どもよりも其父に對して孝行であつたわい。　行れ、好色徒等、めちやくちに行れ！　兵士が足らんからのう。　見い、あの作り笑ひをしてをる夫人を。　襟飾の間から、妾や雪よりも清淨ぢやといはんばかりの貞女めかいた顏を出いて、淫事なぞは聞くも穢はしいと氣取つてゐるが、……淫慾にかけては臭猫や飽滿食つた馬もそこのけぢや。　胴から下は半人半馬ぢや。　上のはうは女でも、只際までを神にいたゞいて、其以下は悉く惡魔に貰うたのぢや。　そこらは地獄ぢや、眞昏暗の硫黄坑に火が炎々と燃えあがつて、惡臭や腐爛や……おゝ穢な、おゝ穢な！　ぺつ、ぺつ！……麝香を一オンスばかり持つて來てくれい。　おい、藥劑商、心持を治いてくれ。　さあ〳〵、代を遣る。

グロー　あゝもし、お手に接吻いたしませう！

リヤ　まゝ、待つてくれ、一寸拭ぐふ。　死人の臭がするから。

グロー　（膝まづき、王の手に接吻して）おゝ、これが即ち崩れゆく大自然の面影ぢや！　此大世界も竟に斯くの如くにして無に歸することであらう。……私を御存じでござりますか？

リヤ　其目附を善う記えてをる。　や、色目を使ひをつたな？　いや〳〵、おのれ、如何様に悪戯をしをつても、キューピッドめ、予は女なんぞには惚れんぞ。……こりや此決鬪狀を讀め。　ま、其文章に注意せい。

グロー　一字々々が日輪であつたとても、私には見えませぬわい。

エドガ　（傍白）これを人傳手に聞いたのならば、迚もよう信じないであらうが、現の事實ぢやによつて、心の臓が破れるわい。

リヤ　讀め。

グロー　え、此拔殼の眼で？

リヤ　おほう、果してさやうか？　頭には目がなく、財布には金がない？　さすれば其方の眼病は頗る重態ぢやが、財布の中は輕いな。　でも其方に、世の成行は見えるらしいのう？

グロー　それは感じまする、

リヤ　や、氣が狂うたか？　人たる者には、世の成行位は目がなうても見える筈ぢや。　耳で見い、耳で。　あそこにをる裁判官が、あの馬鹿な盗賊をやかましく叱つてをる。　聞け、耳で。　さ、とつかへべいだぞ、てんがらどんがら。　さ、どつちが裁判官ぢや、どつちが盗賊ぢや？……おのしは農家の飼犬が乞食に吠えついたのを見つらう？

グロー　はい、見ました。

リヤ　その乞食が怖がつて逃げをつゝらう？　そら、それが官權の大きな影坊師

ぢや。　犬でも職權ですれば遵奉される。……やい　おのれ、獄卒め、其殘忍な手を止めい！　なんで其賣女を打　擲するのぢや？　おのれが脊中にこそ笞をあてをれ。　淫を賣つたからとて、此女を打　擲しをるが、内々は自身其女を買ひたいと思うてをらうが、汝！……高利貸が詐僞師を刑に處する。　襤褸を着てをると、大きな惡德が被れ目から見えるが、大禮服や毛皮の長上被を着てをると、何もかも隱れる。　罪惡に被らすに金甲を以てせい、法律の鋭い鋒尖も能う傷けいで折れてしまふ。　それを襤褸で包むと、小人島の藁しべでも貫く。　誰れにも罪はない、だれにも、一人も罪人はない。　予が保證するわい。　安心せい、予は告發人の口を縫まする權力を有する者ぢや。……（グロースタアに）硝子の眼球でも手に入れたがよい、さうして下等な策士のやうに、見えもせん癖に、何もかも見透いてをるやうにもてないたがよい。……さ、さ、さ、さ。　長靴を除つてくれ。　もつときつく、

もつときつく。　さう。

エドガ　（傍白）條理と不條理とが混淆になつてゐる！　狂氣の中にも道理があるわい！

エドガーもグロースタアも泣く。

リヤ　おれを氣の毒に思うて泣いてくれるのなら、此目を遣らう。……予は汝をよう存じてをる。　汝はグロースタアぢや。　是非に及ばん、忍耐せい。　人間は悉皆號きながら世界へ來たのぢや。　さうぢやらう、はじめて空氣を嗅ぐ時分に、吾々は號くわ、おぎやあ〳〵と。　汝に說法をして聞せる。　聽いてゐろ。

グロー　あゝ〳〵、情ないことぢや！

リヤ　吾々は生れると號く、なんで如是阿呆ばかりの大舞臺へ出て來たかと思うて。……こりや良い山形ぢや。　氈で以て騎兵の馬の沓を包む、そいつは巧

い謀計ぢやわい。　實驗して見よう。……さうして窃と、婿共の寢込へ押寄せたとなるが最後、やつゝけろ〳〵〳〵〳〵！

一紳士コオデリヤの侍士大勢と共に出る。

紳士　おゝ、あそこにいらせられる。……（リヤに）あゝもし、姫君さまよりの……

リヤ　助けてくれんか、誰れも？　や、捕虜になつたか？　あゝ、予は運命の玩弄に生れたのぢやなあ！……大切に取扱うてくれ、償金を遣すから。　どうか下科醫者を呼んでくれ、頭を先二つに切られてしまうた。

紳士　何でもお望を叶へまする。

リヤ　だれも救ひに來てくれんか？　予一人ぎりか？　（涙を流しつゝ）こりやもう人を涙だらけにしてしまふわ、人の目を水瓶の代りにして、秋の花畠の塵埃おさへに使ふやうになるわい、さうぢや、塵埃おさへに。

紳士　あゝもし……

リヤ　予は立派に死んでくれう、飾り立てた花婿のやうに。……何ぢや！　愉快にしようわい。　こりや〳〵、予は王ぢや。　お前がたはそれを知つてをるか？

紳士　はい、よう心得てをりまする、御用を仰附けられませう。

リヤ　それで助つた。……さあ取れ、競走で取れ。　さ、さ、さ、さ。

王走つて入る。　侍士等追うて入る。

紳士　（獨白）極下賤のものが此有樣でも痛ましさの限りであるのに、それが國王のお身の上では、言語道斷ぢやわい！　幸ひ貴下には善い女兒御があるので、他の二人の不孝女が女性に與へた惡名は、其孝心で雪がれるといふもの。

此中エドガー前へ進む

エドガ　今日は。

紳士　や、今日は。　何ぞ用でござるか？

エドガ　さしかゝつた戰爭の事を、何かお聞及びはございませんか？

紳士　それはもう定り切つた話で、身のある者は、とうに承知の事ぢや。

エドガ　先方の軍勢は那邊まで來てをりますか？

紳士　つい近邊まで、しかも早足で。　今にも全軍が見えて來よう。

エドガ　ありがたうございました。　それだけで。

紳士　お妃は仔細あつて此處にお滯留ぢやが、兵は進發する筈ぢや。

エドガ　ありがたうございました。

紳士入る。

グロー　慈悲ぶかい天の神々、此息をお引取り下さりませ、又も惡い魂めにそゝのかされて、御意を待たんで死なうとするやうなことがあつてはなりませんから！

エドガ　お父さん、ようおつしやりました。

グロー　さてお前さん、お前さんは一體如何いふ人ぢや？

エドガ　見るかげもない男でございます、運命の打擊に馴らされて、艱難辛苦を味ひ知つたところから、他の不幸をも直に思ひやりますのぢや。　手をお貸しなさい、どこかの宿りへ伴れていつてあげませう。

グロー　かたじけなうござる。　天の御恩澤、いやが上にもいやが上にも！

オスワルド出る。

オスワ　懸賞のお尋ね者ぢやな！　こりや幸運ぢやわい！　おのれの其盲目頭は、もと〳〵予を立身させるために造られたのぢや。……

劍を拔きてグロースタアに對ひ

やい、おのれ、不幸な、老ぼれの謀反人め、簡短に觀念せい。　汝の命を取る

劔はもう鞘を離れた。

グロー　さ、其親切な手に十分の力を籠めて下され。

オスワルド進んで斬らうとする。エドガー躍り入つてグロースタアを庇ふ。

オスワ　やあ、無禮な土農夫め、お尋ね者の謀反人を何で庇ひ立しをるのぢや？

エドガ　退れ！　さうでないと、不幸のまきぞへを食はねばならんぞ。其手を離せ。

オスワ　離さない、それつきりのことぢやあ離さない。

エドガ　離せ、奴隷、離さんと命が無いぞよ！

旦那、お前さま勝手に其方さ往つて、下の者通らいたがよかつぺい。大言で吹飛ばされて人が死ぬべいもんなら、それはあ二週間とはかゝるまいだ。どつこい、寄らせない、此老翁の傍へは。どかつしやい。どかつしやらないと、おれお前さまの林檎頭のはうが堅かんべいか、此棒が堅かんべいか、

試いて見るだ、手取り早いとが好きだからね。

オスワ　うぬ、塵溜野郎め！

エドガ　それだらおれお前さまの前歯ぶちぬいてくれべい。さあ。如何様に突きこくつたつて闘ないだ。

エドガーは棒を、オスワルドは劔を以て格闘る。とゞオスワルド棒にてなぐり倒される。

オスワ　畜生、やりやあがつたな。……（財布を取出し）やい、此財布を持つてけ。若し榮えようと思ふなら、おれの死骸を葬つてくれい。さうして予の身邊にある書狀をグロースタアの伯エドマンドさんへ渡いてくれい。イギリス方へ往つて尋ねると分る。……おゝ、こゝで死なうとは思はなんだ。こゝで死なうとは……

オスワルド息絶ゆる。

エドガ　予は汝をよう知つてゐる。惡人から言へば理想的に、女主人の惡事を助けて、忠勤を勵んだ奴。

グロー　え、死んだか？

エドガ　お父さん、ま、さうして安心してござれ。……懷中を査べて見よう。其手紙とやらが此方の役に立つかも知れん。死にをつた。他の下手人の手にかゝらせなんだのが殘念なばかりぢや。かうつと。（死人の懷より書狀を取出し）封蠟どの、ゆるいてくれ。禮儀作法も非難するな。敵の心を知る爲には心の臟をさへも切裂く。手紙ぐらゐは許さるべきことぢや。（讀む）互ひの誓約を忘れたまふまじく候。彼人を押片附けたまふべき機會は屢〻あるべし。御許の決心さへ確かならば、時も場所も裕かに供せられ候はん。彼人勝利を得て歸り候ふやうなれば、何一つ成されたることもなく、妾は囚人にして、彼人の寢床は獄なり、其嫌はしき溫みより妾を救ひて入代り、それを其勞の報酬としたまへ。

御許の……妻と名宣らんとする……

妾婢ゴネリルより。

おゝ、無差別な、限界を知らん女の慾心！　あの君子人の夫を殺いて、人もあらうに予の弟と取換へやうといふ奸計！……（オスワルドの死骸を見かへり）こゝに、此砂のなかに、埋めておいてやらう、殘忍な姦婦姦夫の飛脚を務め

た穢はしい奴。　さうして時機を見計つて、此破廉恥な密言を見せて、殺されかけてゐる公爵を驚かさう。　汝の死んだことや用向を彼人に話すことか出來るので、好都合ぢや。

グロー　王はお氣が狂うた。　予のあさましい感覺は、どうして斯う根づよう持ちこたへてゐて、大きな苦み悲みを一々細かに感ずるぞい？　寧そ氣が狂ひたい。　すれば此心が悲みから引分けられ、神經が狂うてしまへば、不幸も忘れられてしまふであらうに。

奥にて陣太鼓の音。

エドマ　手をお貸しなさい。　遠くで陣太鼓の音がするやうぢや。　さあ、お父さん、どこか深切な知人の許へ、お前さんをあづけませう。

二人入る。

第七場

フランス陣營中の天幕

臥床の上にリヤ眠つてゐる。　靜かなる音樂。　一紳士及び他の者共侍してゐる。　コオデリヤ、ケント、及び侍醫出る。

コオデ　おゝ、ケントどの、いつまで生き、どのくらゐ力めたなら、貴下の此度の忠節に報いらるゝことやら？　わたしの壽命や力量では足るまいと思ひまする。

ケント　お認めにあづかりますれば、それが十分のお報酬にござります。　お知らせ申しました事は、總て穩當な事實ばかりで、增しもせず縮めも致さぬ有りのまゝでござります。

コオデ　ま、其服をお改めなさい。　それは不幸の記念ぢや、どうぞ早う脱棄てゝ下され。

ケント　今暫く御免を蒙りませう。　只今本名を知られましては、豫ての計畫の妨げとなりまする。　私が適當と考へまする時機の參るまでは、御存じなき體におもてなしの程を御恩惠として願ひまする。

コオデ　では其樣なされたがよい。……王の御樣子は如何ぢや？

侍醫　靜かにお眠つてゞござります。

コオデ　おゝ、大慈大悲の神々、虐待の爲に怖しう殘害はれました身禮や精神を何卒お治し下されませい！　おゝ、幼兒に變り果てた父親の、調子の外れた感覺を、どうぞ卷戻いて下さりませ！

侍醫　いかゞ致しませう、お起し申しませうか？　久しう御寢なりました。

コオデ　汝の知識で心任せにはからうたがよい。……お更衣は濟みましたか？

紳士　濟みましてござります。　御熟睡中に新しい衣服をお被せ申しました。

侍醫　お越し申します際に、お立合を願ひまする。　御沈靜に相違ございません。

コオデ　よろしい。

侍醫　どうぞお近く。……（奥にむかひて）音樂をもつと高く！

コオデ　（リヤの臥床に近寄りて眠顏を詠めながら）おゝ、父上さま、私の唇に貴下を本復させまする藥力が籠つて、暴虐な姉達二人が御老體に蒙らせた大傷害を、何卒此接吻で治らせますやう！

ケント　孝心の深い姫君！

コオデ　たとひ貴下が父上でなかつたにせい、此白い髮や髯を見たなら、お氣の毒ぢやと思はねばならん筈ぢやに。　此お顏をば荒れ狂ふ風にお曝しなされたか？　あの怖しい石火矢を降らす雷に？　あの神速な、鋭い、すさまじい電光に？　夜の目も合せいで、命知らずのやうに？　此薄手な兜ばかりで？　敵の家の飼犬でも、わたしを咬みをつた犬ぢやとても、あのやうな晩には爐火にあたらせてやつたでもあらうに、それぢやのに、父上、よう貴

下は辛抱して、乞食や非人と一しよに、黴臭い藁にくるまり、むさくるしい小屋にお休みなされたなあ！　あゝ、あゝ！　お正氣と一しよにお命がなうならなんだのが不思議ぢや。……お目が覺たやうぢや。　申しあげて見や。

侍醫　御前さま、あなたがおつしやりましたはうがよろしうございます。

コオデ　御前、お氣分は、いかゞにございます？

リヤはじめて目を開く。

リヤ　墓から予を伴出すのは餘りぢやわい。　貴女は天人ぢやな。　予は、火の車に縛られ、涙を落すといふと、それが悉皆熔けた鉛のやうになつて、身を焦さんけりやならんのぢや。

コオデ　私をごぞんじでございますか？

リヤ　お前さんは精靈ぢや。　いつ死なしやつた？

これにてコオデリヤ絶望の思入。

コオデ　まだ〳〵、中々！

歎く。　侍醫慰める。

侍醫　まだようお目が覺めんのでございます。　暫くお心任せにしておゝきなされませ。

リヤ四下を見廻す。

リヤ　予は今まで何處にゐたか？　此處は何處ぢや？　や、日光が刺す？　予は怖しう玩弄にされてゐるのぢや。　他人がこんな目に遭ふのを見たら、氣の毒で〳〵堪まらんであらうに。　何したのか分らん。　これが自分の手であるとは予や能ういはん。　かうつと。……此針で刺すと、痛い。……予は今、どうしてをるのぢや、たしかなことが知りたい、たしかなことが！

コオデ　おゝ、わたくしを御覽なさりませ。　さ、こゝへ手をかざいて、祝福して下

さりませ。……

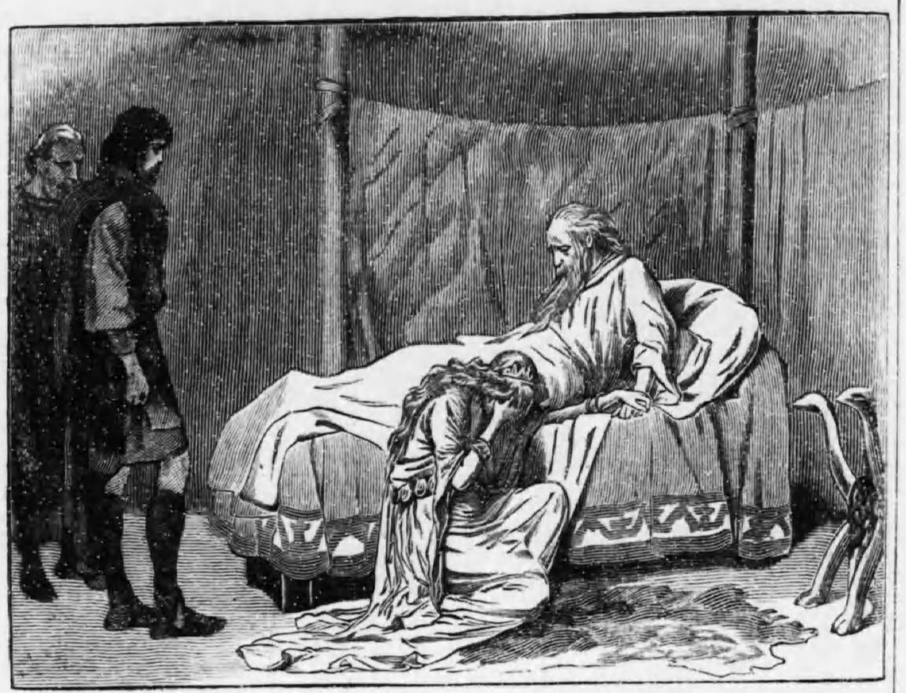
コオデリヤ　膝まづく。　王もひざまづかうとする。

リヤ　いゝえ、そんなことをなされては不可ません。

どうぞ、弄つて下さるな。　予は馬鹿あな、たはけた老人でござる　八十以上の、一時間でもそれよりは多くもなければ少くもない。　そして、正直にいふと、予やどうやら氣が狂れてをるやうぢや。　お前さんも、此人も、予や知つてをるやうに思ふけれど、どうも曖昧ぢや。　なぜならば、第一こゝは何處ぢやか、予は全然知らん。　又有つたけの智慧で考へても此被服を記えてをらんし、昨夜何處で泊つたかも記えてをらん。　笑うて下さるな、予や眞實に此お方は、予の兒のコオデリヤのやうに思ふ。

コオデ　そのコオデリヤでござります。　そのコオデリヤでござります。

コオデリヤ　臥床にすがりて泣く。



リヤ　涙を流いてゝちやな？　おゝ涙ぢや。　どうぞ泣いて下さるな。お前さんが毒を飲めといへば、予やそれを飲みまする。　お前さんは予を愛してはをらん筈ぢや。　何故なれば、姉のやつらは、たしか予を酷い目に遭はせをつたやうに思ふ。　お前は予を憎む理由があるが、あいつらには無いのぢや。何の憎む理由がありませう、何の憎む理由がありませう。

リヤ　予はフランスへ來てをるのか？

ケント　御本國にいらせられるのでござります。

リヤ　えゝ、だますな。

コオデリヤ　絶望して太息する。

侍醫　まあ〳〵、お心强うおぼしめしませ。　はげしい御亂心は、御覽の通り　お鎭りなされてゞござります。　急に何もかも御了解遊ばすやうに强ひまするは危險にござります。　奥へ入らせらるゝやうお勸め遊ばされまして、も少しお鎭りになりますまでは、何も仰せられぬが宜しうござります。

コオデ　あちらへ入らせられませんか？

リヤ　堪忍してくれんければならんぞよ。　どうぞ忘れてくれい、恕いてくれい。予や齡を取つた馬鹿あなもんぢや。

ケント　紳士の外皆入る。

紳士　コオンヲールの公爵が殺されたといふは事實でござるか？

ケント　たしかな事でござる。

紳士　では誰れが其部下の兵をひきゐますな？

ケント　噂によれば、グロースタアの庶腹の伜が。

紳士　世間では、勘當された本妻腹のエドガーは、ケントの伯も一しよに、ジャーマニーにゐるとか言ひますが。

ケント　世評はあてになりませんて。……時に油斷してはをられませんぞ、敵軍はずん〳〵近寄ります。

紳士　殘酷なことになりゆきさうでござる。　ごきげんよう。

紳士入る。

ケント　とにかく今日の一戰で、よかれ、あしかれ、段落が著くであらう。

ケント入る。

第五幕

第一場　ドーヴァに近きブリテイン軍の陣營

鼓手、旗手をひきゐてエドマンド、リガン、紳士等、兵士等出る。

エドマ　公爵の許へ往つて承知つてまゐれ、先般の御案通りであるか、又は其後何等かの理由で方針を變へられたかどうかを。　おのがしたことを批難して、始終變へてばかりをらるゝ。　確定したところを承知つて參れ。

命を受けて一紳士入る。

リガン　姉上の家來は、何か間違が生じたに相違ない。

エドマ　さうかも知れません。

リガン　（うちとけて）エドマンドさん、貴下はわたしが貴下に對して好意を有つてゐることはごぞんじでせう。　おつしやいよ……眞實の事を……事實そのまゝでなくては不可ませんよ。……貴下はわたしの姉を愛していらつしやるの？

エドマ　姉上として愛してゐます。

リガン　兄上でなくつては入られない處へお入りなすつたことはなくつて？

エドマ　とんでもない事をおつしやる。

リガン　わたしは心配でなりません、貴下は殆ど夫婦と呼んでよいほどに姉と同心一體ぢやあないかと思つて。

エドマ　決してそんなことはありません。

リガン　わたしは決してそんな眞似を姉にさせてはおきません。　貴下、姉とは親

しんで下さいますな。

エドマ　大丈夫です。……（奥を見て）お姉上とおつれあひの公爵！

手、旗手をひきぬてアルバニー、ゴネリル、及び兵士等出る。

ゴネリ　（二人の様子を目早く見て、傍白）妹めにあの人との仲を邪魔されるくらゐなら、今度の軍に負けたはうがよい。

アルバ　リガンどの、めでたうお目にかゝります。……（エドマンドに）うけたまはれば、王は我苛政に憤激せる不平黨に擁せられて、其女コオデリヤ方へ赴かれたとの事。正義と信ずるに至らんうちは、勇斷を致しかねるのが吾等の性質でござるが、此度の事は、フランス王が、王を助くるのを本意とはせずして、敢て我國を侵略しようと企つるのであるから、棄置かれません。王及び其黨與に至つては、正當な且つ重大な理由があつて干戈を動かすのでござるから、これに刃向ふことは……

エドマ　（冷笑して）いや實に公明正大なお考で。

リガン　そんな事は如何でもよいぢやありませんか？

ゴネリ　只協力して敵を防げばよいのです。　内部の、個人に關することは當面の問題ぢやありません。

アルバ　では老功の者を集めて會戰の手續を定めませう。

エドガ　すぐさま御陣所へ參りませう。

リガン　姉上、いらつしやいませんか？

ゴネリ　いゝえ。

リガン　いらつしやつたはうが都合がようございますから、どうぞ一しよにいらつしやつて。

ゴネリ　（傍白）おほう、其謎は解つてますよ。……參りますよ。

皆々入らうとする時、假裝したるエドガー出る。最もおく

れて入らうとするアルバニーに對ひ

エドガ　かやうな賤しい者にもお目を賜はりまするならば、一言申しあげたいことがございます。

アルバ　(皆々に)すぐに追附きます。……

皆々入る。アルバニーとエドガーだけ殘る。

エドガ　申せ。

御開戰以前に、此書面を御覽下さい。若し御勝利でございましたら、喇叭を以て此書を持參いたしました者をお呼出し下されたい。見るかげもない私でございますが、書中に誓ひおきましたる事程は、見事に劔を以て證明し御覽に入れまする。萬一にも敗軍なさりますれば、此世に關する御能事は終り、隨つて陰謀も止みまする。御好運に渡らせられまするやう！此書を讀了るまで待つてをれ。

アルバ

エドガ　それは相叶ひません。其時刻となりましたら、傳令使に命じてお呼立下されませ、さすれば再びお目にかゝりまする。

アルバ　では、きげんよう。書面は讀みおくであらう。

エドガー入る。

エドマンド出る。

エドガ　敵は迫りましたぞ。備へをお立てなされ。勤勉なる斥候の此報告で、敵軍の兵力其他確實の事が分りまする。（書面を渡す）。お急ぎを願ひまする。

アルバ　勇んで出陣いたすであらう。

アルバニー入る。

エドマ　姉にも妹にも夫婦約束をしておいたので、互ひに危み疑つてゐる、一度さゝれた者が蝮をあやぶむやうに。どつちを取たものか？　兩方ながらか？　どちらも止すか？　兩方を生いておけば、どちらも此方の

有にはならん。　未亡人のはうを取りやあ姉のゴネリルが憤激して狂人のやうになる。　かと言つて、所夫が生きてゐて見れば、他方の手もまづしと。まづ、ともかくも戰爭中は、あの男の助けを利用することにして、戰ひが濟んだなら、夫を邪魔物にしてゐるあの女に工夫させて、手早く押片附けることにせう。　あの男は、リヤやコオデリヤに慈悲を施さうとしてゐるが……戰爭が濟んで、あいつらが捕虜となつた曉には、……赦免なんぞさせることぢやあない。　おれの今の境遇は厲行が肝腎だ、ぐづ〳〵と考へてゐべきぢやあない。

エドマンド　入る。

第二場　兩軍の間の平野

奥にて鐘鼓を亂打する。　鼓手、旗手をひきゐてリヤ、コオデリヤ、兵士等出て、舞臺を渡りて入る。

エドガーとグロースタアと出る。

エドガ　お父さん、こゝの此木の蔭を深切な宿にしてござれ。　正しいはうが勝つやうにと禱らつしやれ。　今に吉い左右を持つて戻つて來ます。

グロー　めでたう往つてござれ！

エドガー入る。

奥にて鐘鼓亂打。　エドガー又出る。

エドガ　お爺さん、逃げた〳〵。　手をお貸しなさい。　あつちへ〳〵！　リヤ王がお負けなされて、王もおむすめ御も捕虜になんなされた。　手をお貸しなさい。　さあ〳〵。

グロー　手や動かん。　此儘立腐れに死なれさうなものぢや。

エドガ　え、また不良い料簡を起しなされたか？　人間は死ぬも生れるも自分勝手にはならん筈ぢやがな。　何事も覺悟が第一。　さあ、ござれ。

グロー　なるほど、それも道理ぢや。

二人入る。

第三場　ドーヴァに近きブリテイン軍の陣營

凱旋の體にて、鼓手、旗手をひきぬてエドマンド出る。　あとに續いてリヤとコオデリヤ捕虜となりて出る。　部將、兵士等大勢。

エドマ　役人共は捕虜を引立てい。　彼等を處分すべき上官の意向の知らるゝまでは、よう番をせい。

コオデ　志意正しうして最惡の運命に遭遇うたは吾々が最初ではないのぢや。　かさねゞ不幸な父上、あなたの事を思ふゆゑに、我も意地も挫けまする、わたしばかりなら、輕薄な運命の苦い顏をも、見事睨返やいてやりまする。　女兒御の姉たちに逢はうとはおぼしめしませんか？

リヤ　否々々々。　さあさあ、牢へ往かう、牢へ。　二人ぎりで籠の中の鳥のやうに歌を唄はう。　そなたが祝福してくれいと予に賴む時には、予が膝を突いて、恕いてくれいとそなたに賴まう。　さうして日を送つて、祈禱をしたり、歌を唄うたり、昔話をしたり、あの金燦爛の蝶々めを笑うた

り、憫然な奴輩が來て宮中の噂をするのを聞いては、其敵手になつて、誰れは勝つの、誰れは負けるの、誰れは盛えるの、誰れは衰へるのと、神樣の斥候でゝもあるやうに、世の成行の秘密をも豫言せう。　さうして四方壁の牢屋の中で長生して、月の光で滿干する頭領迚の黨派爭ひや其衰滅の跡をも見よう。

エドマ　彼等を引立てい。

リヤ　コオデリヤよ、此樣な犧牲に對しては、神樣自身で薫物を投げて下されう。　え、予やおのしを捉へてをるか？　二人を引分けうとする奴は、天火でも持つて來ねばなるまい、狐を獵出すやうに。　涙を拭きや、涙を。　あんな奴輩に泣かされるものかい。　こちとらが泣く前に、あいつらは肉も皮膚も黴毒で腐りをらう。　あいつらの飢死しをるのを必然先へ見ようわい。　さあ、おじや。

リヤとコオデリヤ引立てられて入る。

エドマ　部將、こゝへ參れ。　こりや。　此書面を持つて、彼等の後を追うて牢へ參れ。　其方の爲に、一歩昇進の途を開いておいた。　此書中に命じてある通りに實行致すに於ては、立派に立身が出來る。　よう合點せい、人間は時勢に從ふべきぢや、女々しい根性は武士には似合はん。　此大切な用向は是非の議論を容さんによつて、奉ずれば可し、奉ぜんとならば、別に出世の途を求めにやならんぞ。

部將　奉じまする。

エドマ　早うせい。　しおほせたならば、身の幸福を祝へ。　よいか？　直だぞ。　書中に命じておいたやうに取計らへ。

部將　荷車を牽いたり飼葉を喰つたりは出來ませんが、人間の仕事ならば致しまする。

二人入る。

喇叭。　アルバニー、ゴネリル、リガン、部將、兵士等出る。

アルバ　勇敢な血統を示された今日のお働き、運命の神にも愛せられ、當の敵リヤ王父子を捕虜となされたはお手柄でござる。　此上は彼等の身分と吾々の安寧とを双方平等に考へ合されて、彼等を待遇せらるゝやう願はしうござる。

エドマ　自分は、あのみじめな老王を、當分然るべき處に幽閉めおき、きつと守らするが當然と考へました。　高齢ゆゑに、既に一種の魔力がござる上、王でもあり、かたぐ〳〵愚民の心を引附け、吾々〳〵が募集し命令しをる鎗尖を吾々の鼻先へさしむけまいものでもござらん。　王と共に妃をも送りました。　理由は同一でござる。　明日なり、其後なり、裁判庭をお開きになれば、すぐにも呼出します。　只今は一同血と汗に塗れてをります。　其友を失うてを

らん身方は一人もござらん。　名義の最も正しい戰爭でも、其害を蒙ると最も甚しき者の爲には、しばらくは呪ひ怨まるゝ習ひでござる。　コオデリヤ父子のことは他日に讓りませう。

アルバ　失禮ながら、自分はお手前を此たびの戰役に於ける配下と存じをる、同僚とは見做しませんぞ。

リガン　それは此方の待遇次第に因ることです。　先づ　私　共の意志をお問合せあつたが當然かと存じます、それほど斷言なさいます前に。　エドマンドどのは　私　共の部下の兵を統率いたしをります上に、私から全權を委托されてをります。　それほど私と密接な關係を有つてをります以上は、あなたの同輩たる資格は十分かと存じます。

ゴネリ　あんまりお逆上でない。　お前さんのお底を蒙らんでも、エドマンドどのは其位の資格はあります、自分自身の德で。

リガン　いゝえ、私が附與した權利で、最上位の人とも同輩になるのです。

ゴネリ　あなたの御所夫になつたつても、それ以上にはなれないわね。

リガン　嘲弄の積りで言つたことが本當になることもありますよ。

ゴネリ　おうやおや！　さういふ豫言をさせる目は斜視といふものです。

リガン　（傲然として）貴女、今は氣分がわるいから言ひませんが、さうでなくば存分申したいことがあるんです。……（エドマンドに對ひ）將軍、貴下に私の部下の兵も、捕虜も、世襲權も悉くお渡し申します、それらをも私をもよいやうになすつて下さい。　城をお渡し申します。　世間の人々を證人にして、私はこゝに貴下を殿御と崇め、主君と立てまする。

ゴネリ　見事つれそふ積りかい？

アルバ　（ゴネリルに）貴女の好意では止めることは出來んよ。

エドマ　（アルバニーに）貴下にだつて出來ますまい。

アルバ　默れ。……止めて見せう。

リガン　（エドマンドに）陣太鼓を鳴らさせて、貴下の權利を確定なさいよ。

アルバ　待て暫く。……其仔細は……（エドマンドに對ひ）エドマンド、其方を大叛逆の罪で捕縛いたすぞ。　其方と共に（ゴネリルに指さし）此金燦爛の蛇をも。……（リガンに對ひ）妹御よ、折角のお求ぢやが、貴下のお求は自分の妻の權利の故に異議を申立てます、妻は此卿に婚約を結んでをりますから、夫たる自分が貴下の結婚宣言に反對します。　再緣のお望ならば、手前へお申込は如何ぢや？　妻は約束濟でござる。

ゴネリ　お茶番！

アルバ　グロースタア、其方幸ひ武裝してをる。　喇叭を吹かせい。　決鬪によつて其方が種々の惡むべき明白なる叛罪を證明する者が出て參る筈ぢやが、若し參らんやうならば、さ、これが予の約束ぢや。（手袋を地に抛つ）。予は聖餐

を味ふに先だち、其方が只今予が宣告した通りの惡人たることを劍を以て其方が心の臟に證明いたさう。

この前よりリガン腹痛に苦しむ思入、こなしあり、此時痛更に甚しくなりたる體。

リガン　くるしや、おゝくるしや！

先刻よりリガンの樣子を尻目にかけてゐたるゴネリル

ゴネリ　（傍白）さうなうては妙藥もあてにならない。

此時エドマンドも手袋を地上に拋つ。

エドマ　さ、これが此方の約束だ。予を叛逆人なぞと呼ぶ奴は何者か知らんが、大うそつきだ。喇叭を吹いて呼出せ。出て來れば、そいつでも、どいつでも敵手にして、きつと黑白を分けて見せう。

アルバ　やあ〳〵！　傳令使！

エドマ　傳令使、やあ〳〵、傳令使！

アルバ　自身の力のみを賴んだがよい。汝が部下の兵士は、何れも予が名義で徵募したものゆゑ、先刻予が名義で暇を遣した。

リガン苦痛に堪へかねる體。

リガン　おゝ、くるしや〳〵！

アルバ　急病と見える。……予の天幕へ伴ひゆけ。……

リガン大勢に介抱せられて入る。

傳令使出る。

部將　傳令使、こゝへ參れ。……（部將に）喇叭を吹かせい。……（傳令使に）これを讀みあげい。

喇叭手、吹け！

喇叭を吹く。

傳令　（讀む）此軍隊中にて、血統若しくは身分高き者にして、グロースタアの假の伯爵エドマンドに對して、其甚しき叛逆人たることを申し貫かんとする者は、喇叭の第三響を合圖に出頭すべし。　彼人大膽に自衛せらるべきものなり。

エドマ　吹け！

傳令　もう一度。

第一の喇叭鳴渡る。

傳令　もう一度。

第二の喇叭鳴渡る。

第三の喇叭鳴渡る。

奥にて返答の喇叭鳴渡る。

エドガー喇叭手を先に立てゝ甲冑に身を堅めて出る。兜の眉庇深くして顔は見えず。

アルバ　（傳令に）何故喇叭の呼出しに應じたか、主意をたづねい。

傳令　お手前は何者ぢや？　姓名は何と？　身分は？　何故只今の呼出しに應じめされた？

エドガ　手前の姓名は腹黑き者の爲に咬取られ螟蛉くはれ、今は名も無き身となりましたれども、こゝにて戰はうとて參つたる其敵手と同格の身分ある者でござる。

アルバ　其敵手とは？

エドガ　グロースタアの伯爵エドマンドと呼び申さば、それに答ふる仁は何處にをらるゝ？

エドマ　すなはちこゝに。　彼仁に用とは何ぢや？

エドガ　先づ劍をお拔きなされ、若し手前の申すことが、お手前の心にさはらば、劍によつて名分を正すために。　手前の劍はこゝにござる。（劍を拔きて高く捧げ）。

御覽せよ、これぞすなはち吾等が武士たるの名譽、誓約、まつた職掌の特權でござる。　手前はあくまでも主張いたす……其方如何に力强くとも、位高くとも、齡若くとも、戰ひ勝つて好運旭日の如くなりとも、まつた如何程に勇敢なりとも、それらに關らず……あくまでも其方が叛逆人たることを主張いたす、神に對し、父兄に對して不信不義、こゝにござる公爵どのに對しては奸計をもくろみし叛逆人、其頭の頂より其足の爪先の塵埃に至るまで蝦蟆のやうに斑に、穢なく、けがらはしき叛逆人。　これに對し、かりにも否と申して見よ、此劍と此腕と此勇氣とを以てして、おのれが心の臟の最底に、きつと大虛言者たることの證據を刻附けてくれう。

エドマ　道理をいへば、先づ其方の姓名を名宣らするが當然ぢやが、外面立派に勇ましく、只今申せしことにも流石に賤しからぬ育ちの證據が見ゆれば、武士道の規則からは立派に拒絶すべき理由あれど、わざとそれを擯斥し、敵

手になつて遣す。　やい、叛逆云々の罪名は、悉く其方が頭上に抛戻すぞ。汝こそは惡魔も忌み憎む程の虛言、雜言を申す奴！　かく罵つても尙我言葉が汝の心の臟を貫かんならば、此劍によつて、まつすぐにそれを送り、とこしなへに汝が胸底に留めてくれう。……喇叭を吹け！

警鐘を打鳴らす。　二人相鬪ふ。　エドマンド手を負うて倒れる。

アルバ　助けい！　助けい！

ゴネリ　グロースタアどの、こりや謀計ぢや。　武士道の法からいへば、こなたは名も知れん敵と決鬪をする義務はなかつたのぢや。　負けたのではなうて騙されたのぢや、あざむかれたのぢや。

アルバ　お默りなさい。　お默りなさらずば、此書面で默らせますぞ。　（懷中より前の場にて受取りたる密書を取出す）。……

エドガー倒れたるエドマンドを更に斬らんと擬す。　アルバニー
これをとめる。

お待ちなさい。……（ゴネリルに）いはうやうなき大悪人、おのが罪悪をお讀みなさい。……

密書をゴネリルの面前へさしつける。　ゴネリル引奪つて裂かんとする。

ゴネリ　いや、裂くまい。　では、おぼえがありますな。

アルバ　おぼえがあつたら如何です？　法律はわたしの手に在ります、お前さんの手には無い。　見事わたしを糺問し得るものがあるか？

ゴネリ　てもさても呆れ果てた！　おゝ！　では此書面を知つてゐなさるのか？　知つてゐることをお問ひなさるな。

ゴネリル席を蹶立てゝ入る。

アルバ　後を追うて往け。　半狂亂になつてゐる。　取抑へい。

エドマ　譴責された條々は悉皆犯いたに相違ない。　のみならず、まだ外にも犯いた罪があるが、いづれ其中に分るであらう。　それも予も最早過去つてしまうた。……それはさうと、運よく予を打取つた其方は何者ぢや？　身分のある者なら、予を殺いた罪は赦いてやる。

エドガ　お互ひに好意を交換しよう。　エドマンドよ、予は血統においては、おのしに勝るとも劣らん者ぢや、もし勝るとすれば、おのしの罪が一段重くなる。おれはエドガーぢや、（兜を脱ぎて）おのしの父御の本妻腹。　あゝ、神さまは公平なものぢや、愉快な淫逸から自業自得の苦痛をおさせなさる。　おのしを暗い處で生ませたのが父御の目に應報したわい。

エドマ　成程さうもあらうかい。　いかさま。　運命の車輪が一巡りぐるりと廻つて此有様だ。

アルバニー　歩みよりてエドガーの手を取り

アルバ　氣高い素性といふことは、最初から擧動に見えてをつた。　抱きあうて好意を表せねばならん。（相擁して）悲哀來つて此心を裂け、若し予其許や其許の父御を愛せないやうであらば！

エドガ　その御厚志はよう存じをりまする。

アルバ　何處に身をかくいてをられたのぢや？　どうして父御の不幸を承知せられたのぢや？

エドガ　始終介抱いたしをりまして。　手短かにお話申しませう、それを話し了つたなら、おゝ、直にも此心の臓が裂け破れてしまへばよい！……行く先々に附纏ふ殘酷な追手を避けまする爲に……おゝ、命はいとしいもの……ふと思ひついて、犬さへも侮蔑むやうな襤褸を著て、狂人に身をやつし、其姿で、父が寶石を失うた指輪の如き無慚な眼をして參るのに廻りあひ、手引

となつて案内し、その爲に乞食もいたし、父が自殺せうとするのをも救けました。　其間曾ぞ……おゝ今思へば手ぬかり！……先刻甲冑を著ました時まで、半時ほど前までは名宣合ひもしませなんだが、多分勝たうとは存じながら大丈夫とも豫期しかねて、父に祝福を乞ふと同時に一しよに歩いてゐた間の一伍一什を語りまするとと、惱み疲れた父の心は、あゝ、激しい悲みと激しい喜びの突然の衝突を支へかねて　莞爾と笑うたまゝ、裂け破れてしまひました。

エドマ　こなたの其話が、予の心を感動させたによつて、多分好い結果が生じよう。其後を話して下さい。　まだ何かありさうだ。

アルバ　よしまだ外に其上の不幸があるにもせい、それは今聞かずともぢや。　今の話を聞いたので　心が殆ど摧かれるやうぢや。

エドガ　悲哀を厭ふ人々には、今お話し申したことが大段落とも思はれませうが、多

きに過ぐる悲哀を彌が上に大きくして極端の上は更に頂點を附ける今一つ。……私が聲をあげて泣いてをりますると、そこへ來た一人の男、私のあさましい姿を見て、最初は恐れて避けましたが、私ぢやと知るや否や、大手をひろげて私の頸を搔きいだき、天をも突裂くやうな大聲で泣さわめき、父の死骸に身を投げかけて、リヤ王と自身とが身の上話、前代未聞の悲慘な話、其話をするうちに其男もまた、餘りの悲歎に逆上せて、あはや玉の緒も切れんとしたる其途端、二度まで聞ゆる喇叭の聲に、據なく其男を、氣を失うて倒れたまゝ、そこに殘いて參りました。

アルバ　して其男は誰れであつたゝ？

エドガ　ケントでござります、御追放となつたケントどのでござります。　姿をやついて、おのれを憎んだリヤ王に附隨ひ、奴隷すらも嫌ふやうな御奉公をせられたのでござります。

一紳士血の着いたる短劍を持ちて出る。

紳士　大變でござります！　大變でござります！

エドガ　大變とは何事ぢや？

アルバ　早く申せ！

エドガ　其血だらけの短劍は？

紳士　血烟が立つてをります！　今お胸から拔取つたばかりでござります。……おゝ、お亡くなりなされました！

アルバ　え、だれが？　早く申せ！

紳士　奥方が、奥方さまが！　お妹御は奥がたが毒害あそばしました、これは御自身のお懺悔にござります。

エドマ　どちらへも夫婦約束をしておいた、かうなりや三人一しよに結婚だ。

エドガ　（向うを見て）や、ケントどのが。

アルバ　生死にかまはず、死骸をこゝへ持つて參れ。……

紳士入る。

天の此お審判に對しては、吾々怖れをのゝくと雖も、彼等を憫む心は起らぬ。……

ケント出る。

ケント　おゝ、これが彼の仁か？……時が時なれば御免なされ、禮儀を略しまするぞ。

アルバ　王たり君たる御方に永のお暇乞を申したさに參つてござる。こゝにはいらせられぬか？

ケント　大切な事をば忘れてをつた！　申せ、エドマンド、王は何處にをらるゝ？

アルバ　そしてコオデリヤは何處にぢや？……

侍者等ゴネリルとリガンの死骸を持來る。

ケント　ケント、あれを見られい！

エドマ　あゝ〳〵、こりや何として？

エドマ　でもエドマンドは愛せられたのだ。彼女はおれの爲に彼女を毒害して、さうして後で自殺をしたのだ。

アルバ　その通りぢや。……死骸の面をかくせ。

エドマ　只一言いひ殘す息が欲しい。本性には違へど、聊か善い事をせうと思ふ。……（アルバニーに）早う使を、早う城内へ！　リヤとコオデリヤを殺せといふ命令書を遣つておいた。早う使を、時後れにならんうちに！

アルバ　走れ〳〵、おゝ、走れ！

エドガ　だれの許へ？……だれに吩咐けたのぢや？　何か取消の證左をくれい。

エドマ　よう心附かれた。此劍を持つて行つて部將へ。

アルバ　急げ、命懸けで！

エドガー剣を受けとり、走つて入る。

エドマ　奥さんと予とが命令けたので、コオデリヤを牢の中で絞殺し、絶望のあまり自殺したやうにつくらふ筈ぢや。

アルバ　おゝ神々、何卒恙なきやう！……此者を暫くあちらへ。

侍者等エドマンドを擔ひ入る。

リヤ半狂亂の體にて死したるコオデリヤを搔抱きつゝ出る。

エドガー、部將、其他ついて出る。

リヤ　吠えをれやい〳〵〳〵！　おゝ、おのれ、木石め！　おれに其舌があり其目があるなら、天の穹窿が摧けてしまふほどに睨んでくれうに、わめいくれうに！　とう〳〵死んでしまひをつた！　死んでゐるか、生きてゐるか〻分らいでかい？　土のやうになつてしまうてゐる！　鏡を借せ、鏡を。若し息が少しでも此鏡を翳らすやうなら、はて、それならばまだ生きてをるのぢや！

ケント　これが約束の世の終局か？

エドガ　または彼の怖しい日の面影か？

アルバ　落ちよ、滅却いてしまうてくれい。

此間リヤは鳥の羽をコオデリヤの唇頭にかざして息の有無を檢する事あり。

リヤ　此羽がいごく！　生きてゐる！　若し生きてゐるやうなら、おれの今までの難難辛苦も悉く償ふことが出來る。

ケント　おゝ御主君！

ケントこちへかれて傍へ寄る。

リヤ　えゝ、あつちへいつてくれ！

エドガ　これはケントどのでござります、あなたさまの大忠臣。

リヤ　えゝ、おのれ〳〵！　人殺しめ謀反人めら、おのれ！　もう少しで救けることが出來たものを！　あゝもう駄目になつてしまうた！……コオデリヤよ、コオデリヤよ！　待つてくれ、もう少し！　や！　何ぢや、何というた？……彼女の聲は柔和で、やさしうて低うて、女には其上もないこと。……そなたを絞殺しをつた奴隷めは、おれが直に殺いたぞよ。

部將　全く王が奴隷をばお殺しになつたのでございます。

リヤ　殺いたらうが？……おれも昔は、鋭利なる偃月劔を揮つて彼奴等をば小兎のやうに跳廻らすることも出來たのに。　もう齡を取つて、このやうな苦勞の爲に、駄目になつてしまうた。……（ケントを見て）お前はたれぢや？　目がよう見えんわい。　今に分らうと思ふが。

ケント　若し運命の神が且つ愛し且つ惡んだと自慢する二人があるなら、それをばお互ひに見あうてゐるのでございませう。

リヤ　どうも目が見えん。……お前はケントではないか？

ケント　その、御家來の、ケントでございます。　御家來のケイヤスめは何處にをりますの？

リヤ　あいつは好い奴ぢや、實に好い奴ぢや。　撲りをる、しかも直に撲りをるわい。　彼奴は死んでしまうた。

ケント　いや、死にはいたしません。　私がそのケイヤスでございます。……

リヤ　今に考へて見よう。

ケント　御零落のはじめから、御艱難の其間、始終お供をいたしまして……

リヤ　よう來てくれた。

ケント　誰れ一人ようは來ませぬ。　何一つ樂しいことの無い、暗い、おそろしい此光景。　姉姫たちは自滅なされました、絶望の餘りお亡くなりなされました。

リヤ　さうでもあらう。

アルバ　辨別もなうて言はるゝのぢや。　今名宣合はうとしても無益ぢや。

エドガ　全く無用でございます。

部將出る。

部將　エドマンドどのはなくなられました。

アルバ　此際それは些事ぢや。……（皆々に對ひ）貴族たち、身方の人達、予の存じ寄りを承知せられたい。　此大不幸に對しては能ふ限りの慰藉を試み、さて又此老殿下存生せらるゝ間は、予は國家の全權を此君に引渡しまゐらせうと存ずる。……まつた……

エドガーとケントとに對ひ

其許たちは、本來の權利の外に、此度の偉大なる功勞によつて當然に收得せらるべき種々の領地や爵位をお受けなされ。　尙身方の人々は、何れも其德に應じて相當の賞を得べく、敵は又それ〴〵其應報を味ふことであらう。

此中リヤ王の容態一變す。

リヤ　おゝ、あれを、あれを！　阿呆めは絞殺されてしまうた！　もう〳〵〳〵〳〵死んでしまう

た！　犬や馬や鼠でも命は有つてをるに、何で和女は全然命がなうなつてしまうた？　もう和女は歸つて來ん、もう決して歸つて來ん、決して〳〵〳〵！……どうぞ此釦を外いてくれ。　ありがたう。　これを御覽か？　あれ、あれの顏を……あれ……あの唇を……あれを……あれを！……

王息絶ゆる。

エドガ　氣絶めさるゝ。……御前さま〳〵！

ケント　心よ、裂けよ、裂けてくれい！

エドガ　もし〳〵、お顏をおあげなされませ。

エドガー王を抱き起さうとする。

ケント　亡き魂をお苦しめ申さんがよい。　去させ申したがよい！　此酷薄な浮世の拷問臺に此上長くお掛け申しておかうとする者をばお怨みなさらう。

エドガ　全くおなくなりなされました。

ケント　今まで持つてゐたのが不思議ぢや。いはゞ命を盜んでいらせられたのぢや。

アルバ　死骸をあちらへ運べ。……さしあたつての仕事は一同の哀悼ぢや。……（ケントとエドガーに）予の親友とも思ふ其許たち兩人は、此國の政治にたづさはつて、何卒此重傷を負うた國を扶けて下さい。

ケント　私は、すぐさま出立せねばならん長旅を控へてをります。　主君がお召なされますから、否とは申されません。

エドガ　不幸な時勢の壓迫には據なく從はねばなりません、當座の感じは言ふとも、當然のことは言はれません。　あゝ、最ち齡を取つたお人が最ち難儀をなされた。　齡の若い吾々は、決してこれほどの難儀もすまいし、又これほどの長生もすまい。

皆々入る。葬儀進行曲。

リヤ王　完

明治四十五年四月十五日印刷
明治四十五年四月八日發行
明治四十五年五月十日再版發行
大正七年八月十八日三版發行
大正八年八月十五日四版發行
大正九年四月二十日五版發行
大正十一年四月十五日六版發行

（不許複製）

リヤ王奥附
正價金貳圓五拾錢

譯者　東京市牛込區余丁町百十四番地　坪内雄
發行者　東京市牛込區辨天町百五十七番地　種村宗八
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎
印刷　武蔵野印刷株式會社

發行所　東京市牛込區早稲田　早稲田大學出版部
（振替口座東京一一二三番）

文學博士 坪内逍遙 譯

沙翁傑作集（第一編）

ハムレット

（十六版）三色版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵税十二錢

此劇は沙翁の作三十七篇中の最有名なもので、苟も文化國の片端に列してゐる國で、此作を譯してゐない國はない。此作に關する出版物だけで、立派に一圖書館が出來る。國だから、此作を讀まれば耻だとなつてゐる。譯者は今から十三年前、之を此傑作集の手初めに譯し始めた。其頃はまだ口語體が今ほど行はれてゐなかつたから、大苦心で雅俗折衷體に譯したが、そこに特殊の趣味がある。原書には英國の學者といへども、專門家でない以上、註釋書なしでは讀めぬ位むつかしい。本譯には此原作に關する譯者獨自の研鑽の餘になつた一大論文が添へてあり、尚雅致に富んだ挿畫數十個（精巧な木版）及び美麗な三色版（名優アーギンゲの扮したハムレット）寫眞版（名優ブースの扮したハムレット）が載せてある。

沙翁傑作集（第二編）

ロミオとジュリエット

（十一版）寫眞版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵税十二錢

これは純粹の戀愛悲劇としては沙翁の作中唯一の物で、劇としては勿論、オペラとして、活動寫眞として、絶えず繰返して演ぜられる。十四歳の處女と詩人肌の青年の不幸な情死譚で、原文はハムレットに劣らず讀みにくい。殊に比喩や口合や洒落が夥しいのを、それを雅俗折衷體で譯した點に非常の苦心と特色がある。沙翁の若い時の作だから、いかにも若々とした麗はしさが全編に溢れてゐる。日繪、挿畫の豐富はハムレットと同例である。

發行所 東京牛込 早稲田 早稲田大學出版部

賣捌所

東京神田 富山房
東京神田 東京堂
東京日本橋 至誠堂
東京京橋 北隆館
東京京橋 東海堂
大阪東區 盛文館
名古屋市 星野書店

（其他各地書舗）

沙翁傑作集（第三編）

オセロー

純粹の家庭悲劇たる點に特色があつて、作者死後三百年の今日讀んでも、極めて深刻な同感を率く。そこに近代劇然たる趣味情調がある。或は之を沙翁の最傑作だと評する者もある。黑面將軍と白皙の淑女との切なる戀、それを破壞するために讒謗奸譎を逞うする人面の惡魔イヤゴーの描寫は古今獨歩で、例の數十葉の挿繪、いづれも譯文と相照らして其舞臺面を髣髴させられる。三色版の口繪に、「ハムレット」や「ロミオ」よりも分り易い。譯もずつと現代語に近づけてあるから、

（八版）
三色版口繪入
木版密畫多數入
定價壹圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁傑作集（第四編）

リヤ王

所謂沙翁の四大悲劇は此作と「ハムレット」と「オセロー」と「マクベス」とであるが、或評者は之を其中の最傑作だといふ。とにかく我國人は老若とも最も深い感興を以て讀むのは此作であらう。といふのは、此作は主として親子間の情操を取扱つて、外國には孝道がないなどといふ輩をして東西至情の一撲に驚かしむるものがあるからである。が、それと同時に現社會を描破なすが、眞に利己的個人性や自然主義的不孝漢が寫されてゐるから面白い。狂人と思はれる程に相絡んで活躍する趣味が無類である。國王が一朝にして乞食同樣の狂人になつてゐるが、全く規模の雄大な悲劇である。此作以下は、譯語がずつと現代的、口語體的になつてゐるから讀み易くて、一層面白い。

（六版）
三色版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第五編）

ジュリヤス・シーザー

沙翁の作中で、政治的興味を中心としたのは此作以外に、もう一種あるきりである。これは羅馬の史實を其のまゝに取拔つた活歷劇なのだが、大詩人の作だけに、千九百年前が目の前に躍るやうである。大英雄シーザー、其政敵カシヤス、其義弟同樣のブルータス、アントニー、此四者の性格の對照が妙を極めてゐる。殊にシーザー死後の大演説の場は今人の血をすらも沸騰せしめる。男性的悲劇とは是れであらう。學校の教課書として最も適當だとせられてゐる。且つ最初に讀む沙翁の悲劇として適當である。

（八版）
寫眞口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁傑作集（第六編）

ヴェニスの商人

明治の十四五年頃に「人肉質入れ裁判」といふ外題で演ぜられたものゝ原本で、今では男裝の淑女ポーシヤ、强慾の高利貸シヤイロックの名を知らない芝居好きは日本中にない位だらう。此作以下は譯者が全く純粹な口語體で譯されたから、註釋がなくては外國人にすら讀めぬ此作が丸で近頃の日本の創作のやうに讀める。沙翁の作は一も讀者を失望せしめないといはれてゐるが、本傑作集も大丈夫、買つてから、あゝ買はなければよかつたと後悔なさる必要はないと保證する。

（六版）
寫眞版口繪入
木版密畫多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部

沙翁傑作集（第七編）

テムペスト

この作は沙翁の絶筆だといはれてゐる。それに關しては卷末に譯者が多年の研究考察になつた一大論文を附錄として添へてあるが、成程さうかも知れない。いかにも豐潤な、深刻な而も綽々たる餘裕のある夢幻的な高雅な喜劇である。前六種の作とは全く趣味情調を殊にしたロマンチックな喜劇で、妖精が出る、半人半獸の怪物が活動する、神仙のやうな人物、男を生れてからまだ二人とては見てゐなかつた處女がはじめて戀を知るなど、感興盡くる所がない。

（五版）寫眞版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵稅十二錢

沙翁傑作集（第八編）

アントニーとクレオパトラ

沙翁の偉大なのは其作の彌〻出でて彌〻、傑特な點にある。作意の變化して窮らない所にある。此作は其作才の爛熟期の最後の傑作で、巧みに世界的悲劇の契機を捉へて「全世界に君たらんか、熾烈なる肉的戀愛を全うせんか」といふ大デレンマに逢著した英雄的放蕩兒が功名の末路を活寫したもので、所謂四大悲劇以外に一新機軸を出だし、諸評家をして沙翁作中の最大驚異と推賞せしめた。殊に、妖女王の性格の描寫は眞に驚異中の驚異で、古今空絶である。其間に丸で漢楚軍談でも讀むやうな男性的、政治的な興味が漲る。

（五版）三色版口繪入　木版密畫多數人　定價貳圓五十錢　郵稅十二錢

發行所　東京牛込早稲田　早稲田大學出版部

文學博士坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第九編）

眞夏の夜の夢

大沙翁の多方面な天才の空想的側面の代表作としては、此上もない醇乎として醇な作である。先づ「テムペスト」に似たものだといへるが、若い時分の作だけに更に愉快、更に奇拔、更に微妙、更に飄逸である。五幕十幾場、其三分の二は悉く夢であり、幻である。想も夢幻的であり、調も夢幻的である。いろ〳〵な妖魔が頻に跳梁して恋に人間を翻弄する。人妖が錯綜するが、それが極めて自然である。理窟を全脫して、而も條理が整然としてゐる。艷情があり、滑稽があり、葛藤があり、悲喜がある。忽ち喜劇、忽ち笑劇、忽ち歌劇、絶對無類の脚色。

（四版）三色版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵稅十二錢

沙翁傑作集（第十編）

マクベス

所謂四大悲劇の一つで、沙翁が技倆の圓熟期の作である。ドストエフスキーの「罪と罰」の結構を更に雄大にし、さうして劇化したやうな名篇である。或は「ハムレット」以上、「オセロー」以上、「リヤ王」以上と稱せられる。わが國へ來た此劇の活動寫眞ばかりでも三種以上あつたらう。それほど傑れた作である。特に本編には、附錄として、譯者が「日本に於ける沙翁研究、飜譯、飜案及び上演の略誌」を添へた。これは我國での沙翁研究の沿革を精査したもので、著譯書とも、其年順、書名、著譯者の名、發行所の名を明かにし、其上演に就いては、其年月、外題、譯者、俳優、劇場までも詳かにしてある。沙翁研究者の必讀を要する。所謂四大悲劇中では、これが一等讀み易いであらう。口語體で譯されてあるだけに、

（八版）三色版口繪入　木版密畫多數入　定價貳圓五十錢　郵稅十二錢

發行所　東京牛込早稲田　早稲田大學出版部

沙翁傑作集（第十一編）

本篇は沙翁が作中で最も皮肉な喜劇と特稱せられるものである。沙翁にも得意時代、失意時代があつたのだが、これは其悲觀時代の一名作で、現實曝露的な所に一味ショーヤブリューらの近代劇と相通ずる皮肉味がある。附錄として、特に難句解が添へてある。印刷、口繪、挿畫、裝釘、其他一切前例の通り。此事は一々これからは斷らないでもあらうが、同例だと信じて下さい。

（三版）寫眞版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵稅十二錢

沙翁傑作集（第十二編）

つい先年英國の劇作者、舞臺監督者のバーカーが最新式の上演をやつて大評判になつた沙翁の最晩年の最練熟した技巧に成つた作である。今尙舞臺上で必ず成功する不思議に歌舞伎劇式の世話と時代と喜歌劇的氣分との混淆した夢幻劇である。四大悲劇ぐらゐでは萬魂の沙翁は分らない。斯ういふ作を含味しないうちは沙翁を語る權利がない。わが國の默阿彌などの講釋種のお家騷動物に一寸似た筋立であるが、其詩としての品位は比べ物にならない。

（三色版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵稅十二錢）

發行所 東京牛込 早稲田 早稲田大學出版部

沙翁傑作集（第十三編）

沙翁が習作時代の傑作で純粹の正史劇の標本で、わが國でいふ活歴劇に相當するが、同じやうに正史本位で書いても、我國の作者と大詩人とではどんなに違ふかゞ此一作だけによつても分る。主人公は王族でありながら嫗婆で、容貌のおそろしく醜い惡魔的天才である。作者はニイチエが大發見らしく唱へた例の逆道德の骨子を、もう既に三百年前に此主人公に道破させてゐる。エリザ劇勃興當時の代表作で、既譯十二編とは全く撰を異にしてゐるところを熱讀なさい。

（三版）寫眞版口繪入 木版密畫多數入 定價貳圓五十錢 郵稅十二錢

沙翁傑作集（第十四編）（第十五編）

沙翁の史劇中の最傑作である。第一、第二と二部に跨つてゐる長篇で、英國の内亂を舞臺面にした勇壯激越な政治的悲劇と、自然の滑稽で人情の頗を解く極寫實的な市井風俗の喜劇とが、無縫の天衣のやうに、巧妙を極めて織り交ぜてある。今尙躍り動くやうな棟梁であるトルストイやショーさへも、此作の喜劇部面だけには全く我を折つて、不易の妙味があると賞めてゐる。沙翁貶罵者の放蕩武士の性格描寫は古今獨歩である。殊にフォールスタッフといふピール樽の化物のやうな放蕩武士の性格は、太分不自然でもある。ハムレットを沙翁の傑作だといふが、其實、あの性格は、優にハムレットに匹敵してゐる。評者の多くはクレオパトラを沙翁の女性描寫としても、作としても、彼れの作中の驚異だといふが、フォールスタッフに至つては、男性描寫として、優に他のすべてを凌駕してゐる。

（再版）三色版口繪入 木版密畫多數入 各册貳圓五十錢 郵稅十二錢

發行所 東京牛込 早稲田 早稲田大學出版部

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第十六編）

お氣に召すまゝ

三色版口繪入
木版密賣多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁が幸福に暮らしてゐた得意時代の作であるので、彼れの喜劇中の最も陽氣な、最も愉快な作だと稱される。讀む者も自然と暢氣な晴々した心持になる。「牧歌的」と特稱される作である。田野山林の詩趣が横溢してゐる。或部分は品のよい喜歌劇とも見られる。舞臺が主として深林中なので屢〻野外劇の脚本にもされる。清淨な、無邪氣な、可憐な、高雅な作意であるから、外國では女學校の餘興用に歡迎してゐる。既譯十五卷中のどの作とも違つてゐる處に此作の特色がある。

沙翁傑作集（第十七編）

ちゃく馬劇らしく

寫眞版口繪入
木版密賣多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

沙翁立身前後に流行つた、ファース仕立の思ひ切つて變から式な喜劇の代表作である。其れ自ら一喜劇である開幕劇へ、本筋の喜劇を編み込んだ趣向が、先づ最も珍らしい。雷聟が雷娘を難なく征服する段取に至つては更にをかしい。不思議に今も尙歡迎される喜劇である。我國では其幾場かは飜案された。本譯には例の挿繪以外に特に名優の寫眞數葉を挿入した。沙翁の喜劇中の最も分り易いのから讀みたいと望む人は、先づこれからお讀みなさい。

發行所 東京牛込 早稲田 東京牛込 早稲田大學出版部

坪内逍遙譯

沙翁傑作集（第十八編）

二夜

寫眞版口繪入
木版密賣多數入
定價貳圓五十錢
郵稅十二錢

既刊「お氣に召すまゝ」の姉妹篇である。學生の同胞の女の方が故あつて男裝してゐるのが間違ひの種になる作意である。此間違ひを骨子とした點だけは作者の習作期の或作に似てゐるが、劇詩としての價値は無論數等優つてゐて、沙翁が作中、喜劇としては最も純粹なものと稱せられ、今尙愛讀もされ、實演もされる。既刊のどの作とも異つた味だから、之を讀むと沙翁の創作力の彌〻出でて彌〻無盡藏なことが分る。上品な滑稽、高雅な戲謔の上乘である。

全六冊完成

イブセン傑作集

四六判美本
口繪數葉入
各壹圓宅錢
郵稅各十錢

1 島村抱月譯 人形の家
2 島村抱月譯 海の夫人
3 坪内士行 島村民藏譯 ロスメルスホルム
4 坪内士行譯 小さいアイヨルフ
5 坪内士行譯 野鴨
6 坪内士行譯 ヘッダ・ガブラー

發行所 東京牛込 早稲田 東京牛込 早稲田大學出版部

選者
坪内逍遙
饗庭篁村
幸田露伴
島村抱月
水谷不倒

校訂新釋者
水谷不倒

（訂正再版）
各卷目次
申込次第進呈

新釋 近松傑作全集

近松に關する空前の大著！

本書の選者たる五大家が近松文學精通の權威たるは言ふまでもなし。不倒氏が夙に意を近松研究に注ぎ、研鑽到らざる所無く、近松通を以て一世に推さるゝ事は、茲に喋々するを要せず。五大家は幾多の研究討議を經て精を抜き粋を集め四十餘篇を選定したり。是等諸作中には非凡の傑作なるに拘らず全く後世に忘れられ、其版本の如きも殆ど全く湮滅して僅に一本を傳へたる珍品も尠しとせず。校訂、解題、註釋、挿繪及び五大家の序論等近松研究として些の遺憾なし。

日本近代文藝の精華！

菊判美裝・挿圖二百餘個
全四卷別に註釋の索引一卷
各卷四圓七拾錢・郵税拾八錢
索引壹圓貳拾錢・郵税拾錢
全五卷貳拾圓・郵税五拾四錢

東京牛込 東京振替二一二三
早稲田大學出版部

終